静かなる　　海城高等学校

白猫の潜りてゆける椿かな
新宿はひかりの数多受験生
宇宙より塵の降り頃水温む
長閑さや遊覧船のかたき席
陽炎を横切る魚のやうなもの
父親に似て硬き髪洗ひけり
夏風邪の空が途方もなく深い
金蠅や机をどんと手が叩き
向日葵の影伸び来たる畳かな
屋根裏の小さき窓や台風来
水澄むや青筋走る掌
日の当たる小屋の白塗り葡萄狩
案山子翁過ぎゆくものの中にあり
防犯カメラは枯木道のみ映し
戦艦のごとき進水おでん種
うつむいてなすすべもなし冬茜
夙に見る峰よきかたち初比叡
一人上がれば双六の紙薄き
あかあかと雪を踏みをる鳩の足
残り火の丈比べたる火鉢かな
どこまでが夢どこからがヒヤシンス
蝌蚪の尾を透け流れゆく塵芥
卒業子大き袋を抱へけり
野球部のこゑをとほくに桜かな
夏近しジャングルジムに雨しづく